



扶桑皇統記圖會

前編

六

遠
2505
13-6



遠
2505
13-6



仲六郎の針らひき。奈良丸古石東人以下一族でも死刑執行の其身の舎兄
 曹成卿をも奈良丸の隠謀を知あぐる疾奏せざる成罪とて筑紫(流刑
 小と定めたる委くハ敵是依て横領家の周障大方あると北堂の敷たふり
 就中姫の悲歎辟する小物なく俱小配所へ召連りて鉄小とて泣き
 の大臣種々小愉一省め流人の身となりてハ妻子と携(行)吏叶などより予一
 且勅勘をせたり流罪小行はるとも此身小犯せる罪無多を程なく勅免と
 得し帰浴を盡し夫までハ母と俱小須史の憂を忍て待しと練りのむ姫も為
 ことをなく只涙ふれて泣伏を痛く此豊成卿ハ固固將監父子小跡の吏と
 何是と命置妻子及び一門の人々小別を告追之の官人小急され怪し乃
 張典小乗られて愁然として配所へ赴ける照日前も夫の流刑を悲し別と
 惜しとも小従ひ行よやく思われれども是も大臣小制し止られ力なく留小残り

白雲流己圖命百四篇五下

二七五カ

通り其當座を別乃致たふ行き姫の妻と志するがかりし月日乃
五す又も継子と悪む悪念再發一良人の飯洛を内小姫を追失らんめと
召使老女と心を合し其便を窺ひたれども豊成卿嫡居の留守中八幡岡將監
夫婦親子交るぐ姫の丙舎小昼夜相結万妻小氣と賦り此も忘りたて獲
傳たる由(継母も手と下)得たる其中小二年まで將監が妻八病小染て死し姫は
十四才小たり又年惠見押勝仲九忽ち君電と弓削道鏡小奪れ憤怒不堪
多致逆を企て其軍利たて逐小江州高嶋おて落命し高野上皇新帝を
廢して重祚し天皇押勝が絶く奏す罪なれ古大臣成を流刑小行ひ天皇
一然御後悔あり勅勅と免して都(百吸)のひを豊成卿大の喜悅ありて
愁眉と開れ飯洛して参内し天皇と謝しちめて芽出度館(帰られ多む)北堂
乃怡び目くたれ姫は福生一人の如く思ひ持衣の袖おとり付て嬉し泣きどあれ

もど理りわりなる豊成卿八姫及び北堂岡岡將監父子其余の家族小の
芽出度對面ありて其無妻を恨む憂多し妻も今昔語とたり門の
人々も飯洛を祝して贈る聘物の使者門前小市たり日乃来客絶回
たの卿食應酒宴お續たれ館の賑い諸人の耳目と羨る。殊更官位も日
乃右大臣小任やれ家の繁昌昔より益増多し斯く霜移り星換りて姫を
十五才小たり天性の玉貌倍艶麗く吾朝の衣通姫漢家の李夫人とつと由此
姫小八及すと見る人眼を奪はれるがかり。槐門高家の息男達婚姻を乞望
る方妻々れども又の大臣八女御宮妃小も備んと兼て思われなきを敢て婚議と承
引れさるる然る小称徳天皇先年桃峯の御宴の節右大臣の幼女が琴と弾
く衆女小優し一妻を思召出させの即ち右大臣小紹して姫と宮中へ徵せし乃
琴を彈させ聴せし先年より又十倍と其礼音清く妙小て空の貌し世

小類なく真不絶世の美人を。春感法うも。三位小叙。中將の御と名付のひ
 敷くの御被物を給りり。姫も右大臣も大不怡。厚く天恩を拜謝し。ま
 て退出。いづく帰館せられ。是より世の人中將姫と稱し。なるなり。継母照日
 前も。今度中將姫が官位を授る。世も名譽を奉り。成見聞おつけ。先年の耻
 辱と思し。愈妬憎。我と瞋患の焰。心と焦。何卒大臣。小忌疎まんと。月
 腹中の老女と高議して。一個の奸針を致け。一日豊成卿。小向の祥と愁ふる面色。
 涙と含。抑中將姫の御更。八女君。小見。おのせ。始より誓。立て。預り。ま。い。せ
 所生の子と思ひ。陰陽なく。大切傳育。成長む。女御皇后。おも。備ん。指。折
 日と籌て。出せ。の。期を待。を。せ。に。豈。を。く。ん。頃。日。内。外。の。人。く。ま。り。姫。の。身。の。悪
 丸。驅。奇。と。安。胸。塞。り。ひ。ひ。が。よ。も。ま。る。不。正。行。余。あ。る。な。ら。と。安。捨。て。今。夜。中。は。脚
 耳。入。ま。さ。り。り。小。其。風。統。い。よ。く。隠。け。姫。の。不。正。密。妻。を。侍。女。下。婢。の。中。小。見。苗

一者も少く。さる。よ。も。密。お。せ。外。に。毎。夜。小。姫。の。内。舎。忍。び。か。ふ。通。入。者。あり。て。時
 小。鳥。唱。子。直。垂。を。著。ま。し。二。時。下。郎。の。姿。小。え。女。の。体。小。身。と。終。装。せ。時。も。待。る
 よ。能。く。窺。む。絨。半。若。れ。法。師。たり。と。せ。り。如。此。小。浅。猿。丸。淫。行。を。ま。い。り。も。か
 と。勢。小。知。れ。て。さ。る。ま。今。八。女。が。心。に。小。隠。ぐ。此。更。世。小。廣。く。知。れ。む。脚。館。の。瑕
 瑾。と。な。り。殊。小。姫。の。身。の。為。も。悪。く。む。い。む。為。と。さ。ふ。告。り。り。ま。る。に。や。と
 罵。舌。と。翻。し。て。ま。も。実。や。小。純。言。し。れ。も。大。臣。八。敢。て。信。せ。れ。ど。無。姓。氏。者。の。中。更
 小。八。虚。説。多。た。よ。か。り。争。う。我。姫。小。さ。る。姫。も。更。の。有。り。女。重。の。中。更。と。必。し。と。り。揚
 ら。れ。と。と。て。更。小。耳。中。も。け。ら。れ。ぬ。照。日。前。小。素。小。相。違。し。て。本。意。お。げ。小。其。夜。ま。て。止
 々。々。小。純。言。の。用。ひ。ら。れ。る。と。憂。ひ。同。彼。老。女。と。密。小。招。れ。妻。刺。を。尽。と。殿。姫。の。更。を
 悪。ま。ふ。小。言。ね。れ。ど。殿。も。只。姫。の。愛。小。溺。れ。信。と。む。む。此。小。如。何。と。ぞ。れ。と。向。れ。老。女
 微笑。さ。ふ。憂。ひ。も。い。と。吾。身。針。と。音。あり。只。我。小。步。任。せ。り。と。退。り。己。が。相。識。と。り。八

内と呼下郎の小女こめして小賢こけんた者を密ひそ招まねた先金銀せんぎんぎんを与たまて其心を懐なつけ諸言しよごんを
 中ちゆうハ其方如此このまうかくかくも拾ひろ當家とうけの姫ひめの丙舎へいしやの庭樹ていじゆの落おち小隠せういんと曉あきら頃たぎら小如せうにく
 てと出い出では是此館このこのみやの北堂きたうの御頼ごたのりなり。首尾しゆびと更さらを仕逐しせふ。北方きたうよりかへり
 賞金しょうぎんと給たまる。一ひととして謀まうを云い合あはれ。慾よく小月せうげつのあね下郎げらうのあつひ一ひと鷹たかの慮りよ
 リ小も及およむと承うけ仕つかへる。老女らうにょ悦よろこび照てう日に前まへ小耳せみみ結むすて如此このごとくも小計せうけいらひ殿との小
 々ささしく小中せうちゆうと云いはる。照てう日に前まへ大おほ小悦せうえつひ其夜そのよ大臣だいじん小向むかひ今夜このよも姫ひめの密夫みつと
 姫ひめの丙舎へいしや忍しのび来きり由よし入いり者もの妻つま小告つげひされも頭露あたま小姫せうひめの丙舎へいしやと檢しらむ
 姫ひめ意い小耻せうぢく身みと過あやちり。只ただ密ひそ小物もの落おちふ忍しのびひひて。人の謳うた歌うたの偽いつはりあつ
 成な見みり。賊ぞくけ小言せうごんれ。大臣だいじん猶なほ信しんが思おもはれ。北堂きたうの度どの疑ぎ言ごん小少せうせう
 一ひと疑ぎ念ねんを生なず。予ま実まこと否いなを弒ころす。人ひとの忍しのんで姫ひめの居間いまの物落ものおち小隠せういん息いき
 と結むすて窺うかがひ果はつ。曉あきら頃たぎら小姫せうひめの丙舎へいしやより怪あやし。男おとこ烏くわ帽ぼう子こ正ただ直ただ垂たれもま

とれ。人ひと者ものとも不知しらず魚うい踏ふしてと啼なり。亦また言いひ度ど重おもく人ひと是これと信しんず
 あり。昔むかし曹そう子しとい者もの闘たたか争を小及および人ひとを殺ころす。然しか小孔くわう子の門かど人ひと曹そう子の母はは布ぬいと
 織オリて居ゐる。小或ある人ひと戯あそべ小曹そう子し人ひとを殺ころすと告つげ。されも曹そう子しの母はは信しんせ。忠ちゆう孝かう厚あつた
 我わが子こ何なにと人ひとを殺ころすと。尚なほ自みづか若かとて機はりを織オリたり。然しか又また人ひと曹そう子し人ひとを殺ころすと
 呼よびて門外かどを過あやはれ。小依より曹そう子しが母はは半はん疑ぎひ半はん信しんと。いま心こころ決けつせ。再また三さん人ひと
 曹そう子し人ひとを殺ころせりと呼よびて門かどをま。母ははも今いま信しんと。思おもひ布ぬいと織オリ捨すて走はし行りく
 街まち乃すなはち曹そう子し維いを殺ころせりと問とふ。否いな。你なんぢの曹そう子しあ。人ひとを殺ころせ。八はち悪あく少年せうねんの曹そう
 子しなり。と言いひ。母はは安心あんしんと。帰かへり。曹そう子しの賢けんか。知しり。其その母はは三さん度ど小及およむ
 偽いつはり言ごんと信しんむ。更さら尚なほ是これの如ごとく。され。豊とよ成なり卿けいも北堂きたうが度どの疑ぎ言ごん小稍せうせう疑ぎ念ねん生なる
 上うへ今いま此この密夫みつと乃すなはち忍しのんで帰かへり。奸けん計けいなり。心こころ付つく。諸しよ人にんの廻まわりも偽いつはりなり。と
 思おもひ。一ひと度どハ怒いかり。一ひと度どハ怒いかり。照てう日に前まへ小向むかひ。怒いかり。涙なみだを合あは。你なんぢが是これを告つげ。訂つづむ。

狐疑して信ぜざるなり。今曉小至て姫の密夫を見届り。我姫亦於てはる汚る行
 冬ホととるりと、思ひさるる小你が見前も面目なり。年来天子の女御皇妃の備
 人と思ひ望も水の泡と消ぬ僧法師小身を汚せ、其身一人の耻辱なり。父
 又母の面小泥土と塗家名と汚し、一門縁体小まで面目を失はむる不義者天聴不
 達し、かむ御咎の程も量れど。是迄婚姻を望し、人々何の面目有て、顔と合す
 るん。噫豊成何なれど。人の舎弟ハ朝敵逆臣の汚名と称らる屍の耻を肆し、人
 の女も不義姪奔舟の貞名と呼まう家系と汚まら。先祖の恐も七生まで勤當
 さを。你的針らひも何方なりとも追拂ひぬ。憤怒の波湯玉の送る。以の外
 小怒れぬ。照日前仕は、心小悦ひあり。拜と押宥り、脚怒ハ理り、心ど
 も若れ時ハ過ちも有あひて。先脚憤りて鎮む。小女小任り、妻が二
 門の方へ預けられ、よく練め、愉して姫の行ひを整させ、と義理を、よく練

され、大臣怒を氣い、鎮まされ、流石思愛の姫も、只今追放よと、言
 ろ。さむ、你小預く。左も右も針らひ、豊成ハ二度耻辱なるとせと、北
 堂小ごち任され、豊小當年称徳天皇の勅詔、小緒卿を交代、緒國遣き
 且國司守護職の政事の可否と、檢め國民の風俗と正させ、ひる、十月ハ右大
 臣豊成卿播磨國を巡見の役小當られ、國國源吾舎弟ハ即兄弟二人、行
 連其餘の従者と率て十月下旬小發足あり。國國將監も大和の國見、とて御見送
 の為小とて、従ひ行たり。照日前、是と願ふ所の時節と、兼て老女小とて、せ
 置、松井嘉兵太と、強勇の野武士と、晴小招れ、寄照日前對面して、され
 々、當館の姫妻兼て親王家の宮妃小備、を、紹あり、る、小兩れ者と、姫、行
 ひ有、天聴の恐、火、憚り、封て、捨、と、良人豊成卿の命下、ま、る、さん、と、妻、が、為、小
 と、継子、かれ、館の内、て、斬、せん、と、継子、を、悪、て、の、所、為、と、世、の、人、の、口、の、端、ふ、ら、ん、

うろろ。你何國か。連行人を殺害し。死骸を隠し首をとりて持て去りて
妻を見せよ。此更世上へ渡せんと。當館の瑕瑾を堅く他へ漏れさせ勿き。首尾
より更と為す。遂に殿へ願て武士を執り過ふの采地を得させ。是は當座乃
賞金として一封の砂金と云ふれ。強慾の嘉兵太大に悦び。儀しも及ぶ領
掌。茲に今夜御迎ふ。明日討まひ。せ御首を持参仕る。約定一
別を告て己が拙居へ。一乗の轎を用意。己が配下の溢者お昇せて其夜
横佩殿の館へ望んで。地行々。

松井嘉兵太と國兵謀義

将監苦忠助申將姫

再説横佩の北堂照日前毒針を嘉兵太の命とて後中將姫と招寄て言れ。何
何ある者の總言やせ。御父君你を殊の外憎む。ひ手討せんと仰せ。種
種く小練や宿ちまのせ。此館に在て。何ある災難の出来ま。と針を

依て妻が門の方へ你を預け。時く小殿の御憤り。宿脚心。和さふを迎へ。よのけ
これ。追ひ彼方。心長閑。暮。夕。もあれ。竹を落と。更。内。の者。お。ま。せ。て。你
の身の。も。耳。う。も。女。が。里。方。の。者。の。迎。不。来。る。ま。で。妻。が。丙。舎。お。忍。び。て。在。せ。と
詞。を。和。り。購。多。れ。は。姫。は。是。継。母。の。深。丸。巧。かり。と。早。推。察。わ。り。其。色。を。由
ん。せ。と。只。よ。れ。申。す。針。を。せ。と。長。者。や。ふ。各。の。お。ぞ。継。母。悦。び。我。丙。舎。連。り
嘉。兵。太。の。未。だ。今。や。遅。し。待。た。る。其。日。も。暮。初。更。の。頃。ひ。嘉。兵。太。轎。を。昇。せ。り
小。門。に。潜。入。来。り。た。れ。照。日。前。大。小。悦。び。中。將。姫。と。伴。ひ。出。て。轎。小。乗。り。疾。く。同
次。以。て。急。ぎ。と。ふ。嘉。兵。太。心。得。て。配。下。の。者。お。昇。揚。させ。北。堂。小。別。を。告。て。小。門。を
出。船。を。馳。せ。て。草。鼻。山。の。山。中。到。り。轎。を。昇。下。させ。配。下。の。賊。お。拙。居。へ。を
諸。姫。と。轎。より。曳。出。て。曰。今。夜。此。所。まで。伴。ひ。ま。せ。御。父。又。右。大。臣。殿。の。命。せ。ふ。と
御。首。と。討。せ。よ。の。御。更。なり。敢。て。我。を。恨。ま。ひ。と。今。ハ。佛。名。と。稱。未。来。成。佛。と

願ひのいと勸められぬ。姫の館を出しより只夢路を誘ふ心地。轎の中平伏して泣
 居のひびく。此時より涙を抑へて嘉兵太に向ひよも教へられたる。吾身又君乃
 仰せ成一度も背く事なす。増て一点の罪を犯せし。又君の命を召し入る
 あつ。皆是延母公吾身と憎むひの御針ひかへ。是も前世より定まれる宿
 業あるをなれぬ。延母公を恨むをなす。よて何れ恨ん。只庁時も早く自
 己の首を斬り。延母公をせよ。せ御心と慰め。斬り後み首の見苦くぬす
 よろしく洗ひ浄め。此上の衣も褻し持行ひ。中着の衣も你小とを奪。下着も重き死
 殿と褻し深れ谷回埋して。但自己実の母公の御善提のよめ。年々く毎日御経
 を六巻で續より。今日まの強ひよ。一巻とも續む。未煉の似れども。御
 徑を續終るまで。劍と下と更勿れ。御徑を續終り。堂と合して。御佛の御名と稱を
 相圖として首を斬てよ。此所にて西何方とて回す。嘉兵太指し。西何方なりと

指教の方に向ひよ。稱續浄土経を續誦ある内。嘉兵太と明晃くたる太刀を抜て
 頭小柄。折し。十月廿日の月影物凄に。御後不実。續経の終る公。親ひ待
 々。可憐中將姫の玉の緒。風の前の灯より危。晷待間の露もも。暮は斯く
 姫ハ浄土経三巻まで。續誦あり。流石二七の雅心。今斬ると思ひ。又心乱れ
 舌寒い。残る三巻と續より。嘉兵太を顧みて。今入見。小て更足ぬ。巻を又
 母現當二世安樂のよめ。二巻。先きのひ。実の母公増進佛果のよめ。今三巻。吾身現
 世の罪滅び亡母公と一蓮の生。成托ん。あかり。早首斬よ。とて再び。西小向の堂と合
 て。南無阿弥陀佛と十遍をう。稱く待も。嘉兵太敢て。刃を下さ。をなれぬ
 姫。紙り。背と願ひ。小。嘉兵太太刀を投捨地上。小坐して。免首居。中將姫。声
 をひ。如何。你疾斬。と。隙より。物思。を。情。か。早斬て。よ。嘉兵太
 漸。身。起。面。と。上。あ。涙。を。潜。と。流。思。拙。君。の。経。文。を。續。誦。し。る。事。を。疾

却首と浴りく青雲の網を承へんと思ひひくは淫春を續編しもう御声懸く妙
小して鬼畜小比一死已が耳と刺串が如く増て鬼くれば継母公と恨くまど御文と
二世安樂とのとす清れ御心底玉金も換ふれ上従ひとあり花も艶麗なる玉
の御肌太刀と當りつゝも所もいと御年もいと推く在とふ御孝心深く死小臨
ゆひても御心を乱しおの御健氣さへ見たり此年月悪吏との業と甘し身の罪
科未来の苦患も忍く送ひの夢も忽ち覚懺悔の心は今世に此上御命を
助けたり左も右も計ひつゝも後日露頭如何なる罪科も行れど
も數かぬ一命惜む足らぬつゝも考へて慾心の為小君を討つ思賞知行と
得るとても不義の富あれを浮る雲小比く將幸ゆて免るゝと我齡百方まで
よも保ちひらばや愚拙が第屋御供仕り山妻と高議し御身と隠し
せん甲斐なく身げくろひて姫の座おもひ背負くろ中將姫御料科も

らど是御佛の御如獲るゆとて路とぐろの中にて御経をど續編しひる斯
く嘉兵太足逸く我押し歸り姫と下しよせ食物あど勧め借妻多
者小有一五二十と語り申せれむ妻はて一度ハ残れ一度ハ始ハ突くも悪心を
翻して助けあせり。此ハあれは継母御堂を何と返答去りて向ふ嘉兵
太答て其儀ハ路上案じ置らうと姫の上衣とを繕己が股を刺し其血泣を衣
小くだ此衣を持て館へ行姫君を討つらうとて御堂を欺ん侮ハ姫君を
介抱し入来る者の見咎さるす一室ハ深く忍むせなれよと命じ早夜も明くる比
横佩の籠と志して走り多う嘉兵太路上思ひ多ハ女性ハ疑念深れよのり
此衣の持持参さるも首何也持持参せると問まおむ返答ハ悪むる。彼館
の長臣國岡將監殿ハ忠直の武士なりと緒人賞美とれハ不如國岡對面し細
を語り其智を借人ハ心定めて將監邸宅へ入り案内とせられ幸國岡



皇朝御記

五



皇朝御記

五

草香山浪金平
本將姫斬
姫經文讀神代
聞て忍地悪心持
徳命助甘菜凡

昨日主君と面責すが見送り。前夜歸宅と在宿るも何人かと呼入て對面
 する。見知る男は、新りあが其来り子細を問ふる。嘉兵太を低て
 自己ハ奈良坂の辺ハ柵松井嘉兵太と呼う浪士おてい當館の御基我と召れ
 中將姫の御更親王家へ御入典有る定り身中。賤き者と不義の行ひあれ
 天聽の恐まてと憚り有依。打て捨と右大臣殿の嚴命下ま。你何方へ連
 行。殺害し首と持参せと檢ゆい。領掌と前夜姫君と伴ひ出て公を
 よし。姫君の御心腹を窺ひなれ。御身お少も御過ち。全く継母公姫君と惡
 しのひての義と推察す。姫君の御命を助け御上を我股と刺し其血を
 上衣おそ。如此計ひてハい。此衣のまてハ御臺疑ひ。首ハ如何と問ふん
 とれ。返答のり。方依て推参お。御對面と願ひ。貴所の御智慮と借度
 所存おていと血汐の衣と取出して見せられ。將監以外の外お發た。ささく如く姫君お

聊も御過ち在ま。親王家の御縁終の義ハ跡形もあれ虚誕なり。皆以て継
 母の奸計なり。我も主君と見送のため他出て其更と敢て知ざり。我妻ハ姫君の
 乳人を勤められ。姫君の御更ハ少の義。我告。不妻ハ去。年死去。其後
 ハ敢とせ。乳人も無。まの二大更も出来せ。你ハ姫君を助けな。おあ。ん
 御苗字と預る。我後日主君へ何と言上。おれ。被。御。姫君の御命乃親
 我為。も。弓矢神なり。我脚。御。其罪と。乳。易。と。い。も
 主君の御苗字。心。被。女性陳謝のま。不慮の生害。有。て。も
 是。主。王君。言上。申。う。姫君の御為。宜。ま。此衣の。疑念
 深。継母。の。信。せ。何。平。欺。方。便。も。手。と。拱。沈。吟。る。が
 忽。ち。喘。と。膝。を。歩。滅。小。の。手。段。を。棄。中。たり。我。一。人。の。女。あり。小。秋。と。呼。ぶ
 當。年。十。九。才。な。れ。姫君。と。は。ま。なり。面。貌。も。さ。と。醜。と。渠。と。御。身。代。小。首。を。斬

て其衣小はくも。今夜持参して母小見せられぬ。夜中より年齢ひくくも真乃
 姫君の御着おんと見違らる御と言えぬ。嘉兵太點首如是ふか御堂を
 欺んまいた身ふいふも。御愛女と御手小掛おんを余小御痛うた義かた。別小
 御小別はいむとやとや小將監首と揮否忠義のこ小一命と捨るハ武士も
 者の常あり女たつとも何と辞するまわん。當時是小待ひとて。座とまき息女の
 私房へ往侍女を遠ざけ女小向ひ声を低て白館の北堂へ姫君を憎も。殿乃
 御苗守と幸小。嘉兵太と又者小徐失ひまかせられ小彼者情ある者ぞ
 姫君の御命と助けなれ。然れども討つてせ。燈小首と北堂小見せぬ。猶疑ひて
 手と廻し。姫君を害せざる。吏治定かり。小依て我你在手小掛姫君の御身代小
 せんと思へ。男子ハ君小命と捧げ。と御大妻小及とれ。君の御小死と潔くする
 ち臣下る者の常あり。女も忠義小する。有るを。此理を并へ姫君の御為小

命と又小得させよと銃輪しなれ。小秋はて此ゆ致く色む。仰すてもわく姫の御命
 小代りも奪らんハ望むとろふ。更小命ハ惜くも。疾く御手小掛むる。と長者
 一や小言々る。將監落涙し。一もやる。流石我女なり。死も後ハ君家の厚
 た御吊ひを受先。母と俱小上品浄土小往生。母子一蓮の臺小坐して。限あり歡
 樂小遇。未代忠孝列女の名と書史小留り。女の鑑と称せざる。へや此世の別ハ益
 せん。と有合水般無の水と柄杓小汲と。又子小是を飲流石思愛死別り涙小袖と
 漫一わが。將監太刀と把て立上りなれ。小秋ハ合掌して口の中佛名と称へ。涙と首と
 さ。伸終小又の手小うとる。と哀れかり。將監涙を。血泣滴る女の首と首
 小入る。出嘉兵太小宮と渡。時已小黄昏小近。早く館へ持参し。母小見せ
 疑念と暗させよと命。嘉兵太ハ將監が愛女と手小掛あが。愁傷の色をも
 見せざる。感歎し。其心中と推量して。落涙し。首と件の上衣小脱。別を告て立

有為轉變の無常と観じ。只願世を憂との小思ひなるが。遂に老病と發し医療し
手と尽しんも更ふ其効なく疾病とわり。余の中小高枕一頼少くをんぞおなる

横佩大臣狩獵雲雀山

豊成於山中遇中將姫條

浪士松井嘉兵太を尋羊の悪心と善道不翻。將監と謀と示合てさりの延母と
欺たをる。將監不別て我家に入る。中將姫及び妻小有。始末と語りて妻
はもとよ中將姫も一度は愧ひ一度は歎た。自己有小甲斐交れ命と存生罪めんを
身代ふせと悲しめ斯と勢も知れぬ。我身你が刃もて死たものと悔
悲しむひ多と。嘉兵太種々練り慰り此六行時も早く御身と都遠た方御供
して世と忍むせまら。御又大臣御飯浴よりまきも。將監殿と商議し。御親子御再
會わりのまき針ひいれと。些少の家賊調度と估却夜中姫と轎に乗。嘉兵
夫婦是を昇て。潛中奈良坂と去去河内路より紀國へいり。何國も忍むせ進

せん。東西南北を徑廻りるる小紀國雲雀山八人跡絶く人の通らぬ幽邃乃地
あれを此地こそ究竟の隠家よとて谷の流小沂り山深く入る。ある木陰に
轎を下し。姫小餉をまよせ。夫婦も食して後嘉兵太近辺をま廻り枯木下枝
をて拾ひ来り。是を柱擁と。茅萱を切ぐ屋根と葺。三人膝を納る針乃
菴を結び。是より妻は沢辺の芥と楠山路の菓と裾ひ一時ハ下折の葉と取時を
洞間の水と汲て姫を育む。夫は里巷へ出く。芳野余熊野緒の旅客小袖を
攤く錢を乞夫婦千辛万苦して中將姫と養ひまよせざるを殊勝たりたる
噫痛くくの中將姫昨日まで、金屋玉室小任錦の帳綾の褥小起卧し
數多の侍女乳人小敬ひ傳くれ身も。今日妨嫌れ草の菴の萱莖推の葉小
盛稗の飯夜の食ハ綴衣と被り露露の傘とさつ小収糸を晝夜称續浄土往と續
彌のひるる昔もうる例あり。天台五等乘國の王法沙石王とせし。最愛の夫小

先別。三才の脚女あり。名と瑠璃女とせり。此小法岩王後妻の夫人を呼迎
り。名を夷鳩陀夫人とせり。此夫人の腹小す。一人の脚女生ま。名と光耶
女と呼ね斯く。姉女瑠璃女三五の春。迎ふ。容貌端麗。其妻世小雙
く。万乃才藝不達。又母小事。孝行深。東陽國の主妙莊
嚴王とす。大國の王あり。彼瑠璃女の風姿艶麗。賢才ある由を安む。ひ
ろひ。太子の后宮小備人と。法岩王小婚姻を求められた。継母夷鳩陀夫人。継子
の瑠璃女。大國の太子小嫁を妬。我腹小生れ。光耶女と東陽國へ嫁せんと
法岩王小瑠璃女の妻を悪。小絶言。遂小瑠璃女と等乘國の北。功
陀羅山とる。遠く深山へ捨せ。瑠璃女。継母夫人の絶言あるを。知れ
又王小とせ。言む。継母。罪小陷らん。妻と厭。罪か。身小罪と受て。鳥も通ぬ
深山へ捨られ。山中の岩窟小在。解脱血盆経と。妙経を。二万部讀補。一千

部書寫。目く小七種の菓を拾ひ。燈明光佛と供養。終小佛果を得。ひ
と名。緘小今の中將姫の御身の上も。彼瑠璃女の難行苦行。不異あり。さりとて
斯く中將姫。憂が中。小年暮。十六才小どかりのひ。然小杖柱とも。憑。松
井嘉兵太。一朝病小染。く。お目。姫も妻も。發。憂。心を。看。病。れ
い。人里離。深山住。を。茶。餅。を用。使。只。神。佛。小。祈。誓。く。快
復を願ひ。小。定。命。小。其。驗。も。終。小。空。く。た。り。姫も妻も。是。如何。せ
ん。頼。む。木。下。小。雨。の。漏。心。地。致。悲。め。也。死。別。の。道。ハ。奈。何。も。為。と。ち。く
泣。菴。の。傍。を。堀。埋。葬。り。石。建。標。中將姫。兵太。が。善。授。の。為。小。と。て
妻。小。命。じて。筆。硯。紙。墨。を。求。せ。母。曾。淨。土。経。を。書。寫。又。續。經。抄。名。と。其
亡。跡。を。吊。ひ。ひ。妻。小。甲。斐。と。く。食。物。を。調。へ。せ。死。拵。夫。小。代。り。姫。と。親。ひ
言。々。却。後。右。大臣。豐。成。卿。ハ。播。州。の。巡。檢。終。り。十。二。月。初。旬。飯。洛。あり。朝廷。へ。更

送る者小ていと謝るを大臣猶も咎めてよ世を憐る者多し。女の余除く人
 跡絶る山中任る者や。察する此豊成を維くさん。女化粧相違有るが
 いづく目小物見せんと弓と満月のて引結おや切て放さんとせれる所。今人の小
 女先暫く待せり。身上隠れや上し。声なきと走り出先の糸を塞りし
 半々も大臣此女の体とはどるる。小髪八荊棘のて乱れ。著る衣も垢
 汚れ。其面雪のて。面貌描るが。美女も。面影亡命せし。ほ
 我娘の面も彷彿とれ。腫を定て。女も大臣の顔とあつ。同もせ
 る。君又上おて。在るも。吾身を中將姫が。ある果ていと。トれ
 多。大臣も。おれ。思ひ。是妖怪の子と。維くさん。仮小我女乃容
 貌小変化。疑ひ。再の声を。励。你予と惑はさん。我女の泣小化粧も
 争う惑はさん。子女。晒き者と。密通。其者小。維くさん。と。小。何

ど此深山小有る疾本相を顯さ。とて再び弓矢番て責られ。小娘
 潜出と涙を流し。吾身露る。汚る行跡。か。を。何あり。今
 纒言小。今の母公松井嘉兵太。と。者。石。中將姫義親王家。入内有る。
 小定。小賤れ者。不義と。天聴の。恐。お。捨。大臣の。何
 國小。お。吾身を嘉兵太。小。嘉兵太。吾身。ある。山中。將。行
 継母公の。小。條。言。せ。小。斬。太。と。抜持。小。吾身。脚。續。い。ま
 て。俄。善。心。泰。將。監。心。合。小。教。を。身。代。小。吾。躬。と。助。け。母。公。の。や。え。を。憐。り
 夫婦とも小吾躬を此山伴ひ。父上脚帰洛在。さ。脚怒。中。省。吾躬。と。帰。糸。させ。入
 と。世。情。深。く。夫婦。辛。苦。と。凌。死。吾躬。と。音。ひ。小。其。嘉。平。太。と。死。去。是。あ。る。兵
 太の妻二人の手小て。今日。露。の。命。と。繋。れ。を。あ。る。小。只。今。不。思。議。小。又。君。不。惚。り。死
 次。小。て。見。し。り。脚。佛。の。脚。手。の。糸。と。て。曳。合。し。り。と。小。と。世。小。難。有。も。嬉。し。も。あ。る。小



再會
 雲雀山
 再會



再會
 雲雀山
 再會

再會
 雲雀山
 再會

猶化粧の者々疑ひ申して。御矢先うけむんといふ力なり。他人の手よりいんり
 又君の御矢の下命と失ひしをんを本意の素り無常露の憂世小頼れ
 命と存命を命んより疾く弥陀の御國へ赤り。実の母公小見よりいづく一箭
 小遊せしと。矢先半で掌と命を命。兵太が妻周障て姫と困い。命と命と
 姫君と助けしと言ふ。姫と押すて只吾身と射し。互小身と惜まむと死と争と
 んく。大臣との妖怪あざと悟り。弓矢をうむと。投捨諸の真の我姫なり。是
 と愛小あむる。まり寄て姫と擁抱れ喜涙ふれ。近習の士村長
 們も。奇異の思とて。居る。大臣の姫の手と採て菴の中へ嘆息く。慚
 愧の額と撫。予思ふて後妻の奸計欺れ。你と実不義者と思ひ。且の怒
 小く。と実不と。館を追く。命。朝廷の役義黙上。其を置へ
 下。飯洛の上。你的義と向。彼密男小。能除と。行方と。是と

も偽言と。志と。你を恨。面目無き。然不斗。今日此山中。還り會。偏
 小氏神春。明神の導。せの。所。人。是。就。も。只。悪。む。分。れ。後。妻。乃。妬。心。か。り
 ち。返。と。賞。を。命。れ。嘉。兵。太。活。命。の。情。な。り。存。命。を。重。賞。禄。と。あ。ま。り
 姫。命。の。思。小。酬。分。れ。早。く。死。去。せ。し。を。残。心。な。れ。飯。洛。の。上。厚。く。佛。更。作。善。を
 管。む。命。と。て。其。妻。小。此。年。月。の。父。抱。の。傍。と。深。く。謝。し。も。諸。姫。と。嘉。兵。太。の。妻。を
 将。持。場。の。陣。所。へ。飯。國。岳。源。香。を。召。て。中。将。姫。の。此。山。中。小。忍。居。も。い。始。終。を
 玲。り。予。今。自。當。山。小。狩。獵。と。姫。小。還。り。會。へ。棋。麟。を。狩。獲。し。も。勝。り。大
 獲。物。な。れ。今。小。狩。獵。も。是。を。な。り。勢。と。班。り。帰。館。を。促。し。命。せ。れ。れ。た。と
 源。吾。領。掌。し。諸。士。君。命。傳。勢。と。班。り。帰。館。の。准。備。と。な。り。時。小。中。将。姫
 又。大。臣。小。向。吾。身。事。不。斗。又。君。小。還。會。も。身。の。嬉。し。さ。喻。な。り。と。く。と。も
 吾。身。館。へ。歸。り。を。な。り。今。の。母。公。御。身。と。愧。ひ。館。を。辞。して。御。里。へ。歸。り。去。り。と

のひま。此時幸己お改りて姫十才ふかりのり。諸大臣、姫と松枝の物結わて國
 岳將監の女小殺が姫の身代となりて死する更と申。大乃感、哀もて平城乃
 東大寺に於て大法度を執行ひ、小殺と嘉兵太の靈と祭り。厚く七跡と吊りま
 ぐ。時、朝廷に、稱徳天皇崩御在り。先仁天皇天下と知、他戸親王と太子小
 立のり。曆号も寶龜と改元さる。中將姫、二八の春と過りて容貌
 倍艶麗く、譬を金谷千樹の若瑤池玉樓の月ともいふ。毛燭西施も
 面を愧、李夫人楊貴妃も顔を失、許かね。其まえ天聽小達し。春宮の后
 妃も備られんと内、其御沙汰有るを、豊成卿大乃悦喜あり。年來の宿望
 成就し、死時節近著たりと。中將姫も其義を言、され勅詔の下をも心待
 小ぞ待まらる。姫は、思ひのひま、吾身、継母の絶言、疾斬るを、小
 嘉兵太、情、不測、命と助けられ、偏小御佛の救、せのひかり、傳、歩、大

思教主の如来も上かれ、深茶の王位を捨り、宮中と潜出、檀特、雪山、入、捨
 身の行を、無上正覚の道と得、ひ、ま、ま、お、王宮、撰、館、皆、大宅の、栖、小
 て。女御皇妃も、只、夢の、富貴、あり。それ、佛道、修行、此、苦界、厭、離、安
 艱、淨土、往生、んと、無、究、樂、ある、を、兼、て、聞、當、麻、寺、
 尊、佛、法、の、道、場、あ、て、雙、た、た、殊、勝、の、地、か、り、と。吾、身、彼、御、寺、入、心、靜、小、道、と
 修行、御、佛、小、仕、も、ん、の、と。ま、二、八、の、盛、盛、か、る、身、小、向、無、常、と、觀、ひ、ひ、松
 枝、の、其、上、思、結、り、せ、と、小、館、を、潜、出、と、密、小、准、備、と、た、り、ひ、御、又、大、臣、小、金、所
 あ、が、う、今、生、の、御、を、辞、あ、ん、と、平、日、より、一、際、花、小、化、粧、装、束、も、化、麗、の、綾、羅
 錦、綉、と、着、の、ひ、ま、其、ま、曉、小、綻、ひ、初、花、も、艶、お、て、將、小、天、津、乙、女、の、下、界、又、降
 一、と、疑、れ、更、小、人、界、の、人、と、思、れ、ぬ、許、か、り、中、將、姫、徐、小、殿、中、と、傍、徨、て、入、り、り、の、小
 是、亡、母、の、御、紀、念、の、玉、櫛、筥、彼、又、君、の、御、清、玩、の、歌、扇、風、と、ん、も、今、更、餘、波

惜しめ搦干小侍もあまのむすむの菊の籬蘭の臺幼稚推るゝ其昔枝を攀茶を
 摘し更すて思ひ出され非情草木まき今日限と思ひて不覚の涙小徒を
 泣くもひたり斯く御又大臣の前ひよりゆひ。二三御物語ある申小中将姫覚を
 もろくと涙をわろひゆひと大臣不審あり你は何れ落涙もまると向ひ
 姫もつと思ひ氣どろろ斬平て只今又上の御貞を見まもひし御幸留玉
 ひ大内の御勤仕小芳の由ゆ。御貞も老させむを見えまのせ不覚涙のそれ
 と奮るかりと言終りのを。大臣姫の心中と知む。其孝心深れたるを感ぜられ
 昔伯俞と縋る人老る母を答まき時其答杖の力乃襄し悲心も泣
 とど。今你も子の老るを致さむは孝心なり。されんて老る者なり。只子
 る者其身を慎み立身出世して親に侍の誓と揚るると孝行の弟に
 とど仰る姫。此言とゆ。心中小吾身館を潜出當麻寺入る尼となり

とせむは。さこそ怒も歎もまゐるらん。胸までせれる涙を強て抑へ其より何と
 あれた物語ありて御前と退れり。佛回入る故母公の靈位と拜し浄土経を續
 編し。ひ脚いりも右其夜人定。是て後松枝を先小立て。密小館の後門より
 潜出當麻をまて。剽り素り乘乗轎もな。履もあつぬ草履をまのひ
 松枝一人を便す。燈もあれ夜の路をたど。歩もゆる程。足も草履小まれ
 傷も血流まで路上の叶葉と深。且休且歩。幾千の辛苦と忍び行程七里の道
 成幸して夜の明方。當麻へ剽着松枝小案内。せり僧房へ入る。剃髪乃義
 を頼め。小任僧中將姫の客顔とほくぐと。入てヤ々る。御出家の御望殊勝の
 御更あつ。へ中。御年若く。殊更。あつとあれ御方と見えさせむ。怪しく御髪と
 剃ま。へん更後日御咎も悼りあれ。只思召止りのを練られ。姫押入。吾身
 とささす。の貴家の者。小て。い。と。賤れ市人の女。小て。い。幼きと。又母。小後。れ。姨

御前の親言ふて成長もす。其姨御前も頃日世と去の頼む方あれ身を
 世と厭く思ひ折す。是たも人も未後れ親属も離れ元法師とも姿を
 うたやとやさる小連吾身もけり御佛小仕(まろく)御寺と頼まわらせん
 とも遠くと歩連(まろり)たり何卒望て叶(ふ)兩人とも御弟子(でい)なして給ふと
 又余義もたのめいれ。住僧も其志(こころ)の委(まか)せられをん。左程(さほど)と思
 へるふあを徒弟(でい)か進す。髪(かみ)も髪を剃(か)り義(ぎ)ハ誓(ちか)さ延(の)先
 三飯(さんべん)五戒(ごけい)を授(ま)げや。是(これ)と授(ま)げ借(か)り多(おほ)く男僧(おんそう)をりの寺(てら)中小(ちよ)女性(にょせい)を
 置(お)きよせん。人の疑惑(ぎく)を生(な)ずる理(ことわり)小(ちよ)の寺(てら)の傍(かた)小住(せうじ)刀自(たうじ)の彼(か)方(かた)小居(せうき)
 ひく僧法(そうぼう)を習(まな)ひ多(おほ)く。門前(もんぜん)の刀自(たうじ)の家(いへ)小(ちよ)入(い)る苗(な)め住(す)めたり。却(かへ)統(と)横(よこ)佩(はい)の
 館(くわん)小(ちよ)中(ちゆう)將(しやう)姫(ひめ)館(くわん)小(ちよ)居(い)る多(おほ)く。侍女(じやうにょ)們(ら)強(かた)く感(か)んひれ。大臣(だいじん)も大(おほ)小(ちよ)強(かた)くは
 勢(せい)乃(の)入(い)歩(ふ)と八(は)方(かた)分(ぶん)て遠(とほ)近(ぢか)と尋(たづ)ねせ。捨(す)身(み)有(あ)り。更(さら)やとて。洞(ほら)川(がわ)洞(ほら)を

入山林(いりやま)百草(ひやくそう)と分(ぶん)て尋(たづ)ねせ。更(さら)其(その)御(ご)行(ぎやう)方(かた)まれば。侍女(じやうにょ)女(にょ)重(おも)い。泣(な)き
 悲(かな)む。列(れつ)の更(さら)あ。大臣(だいじん)も夢(ゆめ)小(ちよ)夢(ゆめ)人(ひと)如(ごと)く。脚(あし)敷(し)く。陰(かげ)陽(やう)頭(かぶ)小(ちよ)陰(かげ)
 ト各(それぞれ)小(ちよ)御(ご)命(めい)ハ別(べつ)条(じょう)在(あ)り。兩(りやう)三(さん)日(にち)の中(なか)小(ちよ)御(ご)在(あ)り。所(ところ)相(あ)い知(し)る。口(くち)文(ぶん)の趣(おもむき)
 を言(い)上(あ)る。大臣(だいじん)少(せう)心(こころ)を女(にょ)んせ。猶(なほ)人(ひと)を分(ぶん)て緒(いと)方(かた)と尋(たづ)ねせ。をら。小(ちよ)
 國(くに)岳(たけ)六(む)郎(らう)を歸(かへ)り。姫(ひめ)君(きみ)松(まつ)枝(え)と名(な)連(れん)當(たう)麻(ま)寺(てら)入(い)り。寺(てら)僧(そう)の徒(でい)弟(てい)小(ちよ)たり。小(ちよ)
 由(よし)小(ちよ)ゆと言(い)上(あ)る。小(ちよ)ふ。大臣(だいじん)少(せう)心(こころ)の侍(さむらい)ハ先(ま)日(にち)何(なに)と。物(もの)語(ご)の中(なか)小(ちよ)姫(ひめ)が。落(お)涙(なみだ)せ
 八(は)今(いま)生(なま)の意(い)辞(じ)の意(い)ふ。有(あ)り。其(その)時(とき)と。知(し)る。練(れん)苗(な)む。と。後(ご)悔(かい)
 急(いそ)に乘(のり)典(てん)を以(もつ)て迎(むか)へ。六(む)郎(らう)小(ちよ)妻(つま)の入(い)歩(ふ)と。當(たう)麻(ま)寺(てら)を向(むか)へ。向(むか)へ。六(む)郎(らう)君(きみ)命(めい)と領(りやう)掌(じやう)
 同(どう)門(もん)前(ぜん)の刀(たう)自(じ)が。家(いへ)往(ゆ)き。姫(ひめ)小(ちよ)對(たい)面(めん)。大臣(だいじん)の御(ご)愁(しゆう)傷(やう)と。噴(ふ)き。急(いそ)に。御(ご)殿(てん)館(くわん)か。小(ちよ)
 小(ちよ)と。小(ちよ)姫(ひめ)ハ。剃(か)り。髮(かみ)ハ。仕(し)め。の。長(なが)かる。翠(すい)の。髮(かみ)と。半(はん)敷(し)捨(す)松(まつ)枝(え)と。俱(とも)

其後ハ迎ひの義を止め改めて國岳源吾を使者と當麻寺遣はれて寺僧
 小姫の守衛の義を能く命ぜられ當麻寺の傍乃山草菴と号し建たれ姫と松
 枝を任め寺領の菜地を寄附しゆり其菴室を紫雲菴と号し今猶本
 堂の傍小跡遺まら當麻の護念院是なり斯て中将姫十八才小なり其年の
 六月十五日寺僧実雅とる知識改めて戒師となり法式嚴重小數共衆僧を本
 堂小集て経を誦し花を散し中将姫を中央の儲の座(清)とて緑の髪を剃落し進
 せ法名を善心笠尼と号し其後佛法如と改めり世の人々中将禪尼とも稱す
 其次小松枝を剃髪させ松栄尼と号し其日右大臣豊成卿も参詣あり中
 將姫のうも艶やうある黒髪を剃落を乞ふ流石恩愛の親心小忍びかや在
 り敷行の落涙小衣紋の袖を漫まらる借戒師と先く衆僧又種々の妙経
 を續誦し法式残る所なく畢るに右大臣殿より授僧(布)絶と引き方丈にて饗

膳の管侍とて大臣ハ飯京せられ中將尼公六堂のて出家得道今人心か
 る雲もた浮世の纏縛を遁き松栄尼を法の友と朝夕後世の管とち行ひ
 とあて在りたる小松栄尼ハ其年の冬夜初の疾小津てお臥々々漸次小重りて
 終小命終りて善心尼公深く歎れ憐れむ以七骸と厚く葬り跡懇小吊ひ
 たり御る小尼公の菴室の庭の叢より長五尺許の大蛇這出く眼を睨し口を
 開き舌を閑りて小尼公と睨も席上這上りて小尼公槍をさす座を去り
 去り草木國土悉皆成佛とせり蛇とて成佛の縁なりともいふを傳史昔
 吞舟の大魚ハ一度稱名の声をやう慈悲心を起し死して羅漢小生れとかや増々
 尊允脚経を穿む湿患の因を去成佛の果を得ん更疑ひ有らざる事とて蛇小向ひく南
 無飯依佛飯依法飯依佛と三飯を授け法華経の提婆品を續誦し其の
 志とせり蛇も妙経也恐るを其より引返して是(這)入る事是より此蛇時と



中將姫



中將姫

母命を借
悪念止す
毒を治す
道徳を
果てぬ

皇統記 卷之五 前篇 五

もかく此所彼所より這出。尼公近着んとされども。尼公蛇小佛果得せん出
 る毎法華経八抽を取替く續編とせせり。更凡三七日及びひたる。其後八何
 あるゆへや。件の蛇絶て出る。更たうり。出中將尼公或夜の夢。彼継母照目の
 前在。わりの姿。現き。妾伎初の妬心より。孝心厚た。脚身と悪。山下遠内。命
 じて失せん。或百草の餅。毒茶と加。或嘉兵太をうりて。封せん。謀り。百般小
 心を尽せり。佛菩薩の守護。入る。脚身。あれた。奸巧。皆齟齬。却く。小遠次
 豊丸。小我。們。非業の死。と遂。させ。所有。罪を。造。る。猶。ころ。ご。ま。小。脚。身。の。無。更。小
 帰。の。心。更。の。腹。黒。く。横。佩。の。館。わ。も。任。か。り。疾。小。托。け。親。里。帰。る。と。い。ふ。中。將。姫
 世。小。存。命。ご。む。百。年。も。横。佩。乃。館。在。入。の。と。偏。執。の。悪。念。猶。増。終。小。氣。病。と
 身。死。た。れ。も。嫉。妬。の。魂。陽。土。の。遺。一。念。毒。蛇。と。なり。て。脚。身。小。冠。せ。んと。此。日。頃。付。担。ひ
 る。脚。身。の。道。心。堅。固。ある。お。壓。して。近。着。更。能。と。具。法。華。経。續。編。の。功。力。小。引。き

一念發起して罪科も滅ひ成佛得脱する。更と得たり。是よりわが脚身乃信心の
 余徳小よれ。南無中將。得。尼。大。知。識。と。称。合。掌。礼。拜。忽。ち。身。より。光。明。と。放。ち
 此系雲小乘。て。西。天。私。去。と。見。て。夢。の。覚。り。尼。公。隨。喜。の。涙。を。流。し。て。西。方。と。礼。拜
 一。の。日。其。日。より。衆。僧。を。集。て。一。七。日。間。大。法。更。を。執。行。れ。継。母。照。日。前。の。靈。位。を
 先。と。豊。子。名。小。遠。次。小。我。將。監。嘉。兵。太。夫。婦。等。の。靈。位。を。祭。其。善。提。を。志
 吊。ひ。の。り。又。右。左。豊。成。卿。ハ。世。嗣。の。男。子。在。さ。り。御。家。門。より。養。子。と。迎。て。世
 嗣。と。せ。れ。多。是。と。藤。原。の。継。繩。と。や。せ。り。後。年。奥。州。の。夷。賊。征。代。の。時。拔。群。乃
 軍。功。を。立。れ。此。人。か。り。是。具。ち。豊。成。卿。ハ。中。將。尼。公。の。十八。才。の。冬。十二月。お。老
 病。き。發。て。薨。去。あり。了。壽。六。十三。才。と。申。す。中。將。尼。公。大。小。脚。愁。傷。あり。く
 種。の。追。福。と。修。り。中。陰。の。間。喪。小。小。菴。り。父。君。の。願。生。善。提。の。為。且。六。実。母。継。母
 佛。果。の。為。小。稱。讚。淨。土。經。一。千。卷。書。寫。の。大。願。を。起。し。の。ひ。昼。夜。寢。食。と。忘。れ

一心不乱小書寫しゆひたる程小至五年九月末つる小千卷書寫の功畢
 久む。尼公歡喜しゆひ。御徒弟の緒比在尼至及衆僧を聚て開題供養
 を執行ひゆひ。千卷を百袋納く経藏収めり多。抑浄土經一千卷の書
 寫を達華の男子たりとも。三年の月を徑むる寫り得るを女性とす未だ
 二十少も満むる御身も。僅半年の功を終り更減ふ人及ぶ所あり
 全く觀音の御再誕なるを。僧俗とも感歎し。御徒弟たり更と願ひて
 法門小取する女僧達と多り。時中將禪尼思ひまら。浄土經一千卷の願
 寫已不成就せり。此功を三世の緒佛納受かりゆひ。三親の靈を西方浄土引
 接しむる。其證小今日より七日の中。生身の阿弥陀如来と拜しゆひ。此願
 叶むる。水食と断り。餓死を乞ふと誓ひゆひ。六月廿日より本堂の内陣小坐
 王。法甚徑二十八日を繰返り。續禱して祈りゆひ。然小廿五日の亭午小

忽然一人の老尼出来り。尼公の前小坐し多。尼公不審。御身何國の
 人小。何のさめ此所。来りゆひ。向ふ小。老尼答て。吾ハ西國より来り。御身天
 性孝心深く。三室小飯依り。更厚た又吾御身小極樂浄土の体相。寫り
 て拜せ進せん。為此堂小来りゆひ。中將尼公大に歡喜しゆひ。妻年久し
 其更と望むも。願くハ疾く寫して拜しゆひ。老尼曰。然む百駄乃
 蓮莖を求り。尼公諾し。自力小及ぶ。都の館へ使僧と立。百駄乃
 蓮莖を給りゆひ。乞求のゆひ。経繩卿承引あつ。其上且と奏聞せられ。勅
 光仁帝も中將尼の道心殊勝多。食及むせむ。乞小任と命ぜり。勅
 許なりゆひ。是依て経繩卿大和河内紀伊の三個國小於。百駄の蓮莖
 を刈集させ。當麻寺へ贈られ。尼公始りゆひ。老尼小斯と告り。老尼中
 將尼小指揮し。蓮莖と折り。藕糸と繰出させ。其身も。藕糸と繰出。庭の

死し。次つぎ下縁したのり。極樂淨土ごくらくじやうどの上品じやうぶ生なまより下品げぶ生なまのままで九品くひん淨土じやうど往生じやうじやうする
と。の体相ていさうを織オリりたる。遂ついに指教さしけうて相傳さうでん。其その后のち老尼らうにより曼荼羅まんぢらを
三度さんど礼拜らいはい。偈げを唱なぐ曰いく

往昔迦葉說法處

佛事新起又有故

感君懇志我未此

一至此場永離苦

是こののうて唱終となひおひり。尼公にこう向むかひ大曼荼羅だいまんぢら已すで成就じやうじゆ。脚身きゃくしんの大願たいがんも満足まんじくと下
今この我われも歸かへりるまと有あり名な危公あきこう其その袂たもとをのひ久留ひさどるま奇特きせきを示し。吾身わがみの願ねがひを
叶かなせし。脚身きゃくしん何いかなる脚方きゃくかたおて在なるま。又また先まづ機はかりを織オリりし。女性にょせい何いか人ひとおていはす
と向むかひし。老尼らうに忽たちち端嚴たんげん微妙みせうの佛身ぶつしんと變へんじしのま正半しやうはんと脚身きゃくしんより光明くわうめい放はなす
ちまた吳ごハ予よハ是こゝ西方さいほう淨土じやうどの教主きやうしゆ阿彌陀佛あみだぶつなり。先まづ曼荼羅まんぢらを織オリりし。右みぎ脇わきの脇士わきし
觀音くわんおん善喜ぜんき菩薩ぼさつなりと示し。のま脚手きゃくてと以もつて中將尼ちゆうしやうにの頂ちやうを摩なりし。善哉ぜんざい。くま你なんぢ勉哉めんざい。今この

より十二年じふにねんの後のち予われ必かならずと你なんぢと迎むかへて極樂淨土ごくらくじやうどより再會さいかいをなす。と妙音めうおん高たかく宜よろひ
く座ざをまたし。忽たちちまて虚空こくう小音樂せうおんがく響ひびく。天花てんか降くだり。異香いこう芬郁ふんよくと薫かんじす
光明くわうめい四邊しへんを照てす。紫雲しゆんより引ひく。中ちゆう如來にょらいハ即すなはち淨雲じやううん小乘せうじやうて西せいの天てんへ飛と去きす
のま二上にじやうが樹じゆのまたより脚姿きゃくさ幽ゆうふまたえませしのまひが。それより八足はつそくをな成なすまひなる
中將尼公ちゆうしやうにこうハ此こゝ奇特きせきとまひく。脚後きゃくごと伏拜ふくはい。隨喜ずいきの涙袖なみそでお餘あまり。渴仰かつおうの思胸しきゆうハ
満まん今このをま生身じやうしんの阿彌陀あみだ如來にょらいと拜はいす。且かつ藕絲うすの曼荼羅まんぢらをま感得かんとくありて。如來にょらい直ちやくの
脚相傳きゃくさうでんを受う。曼荼羅まんぢらの變相へんさう定散じやうさん二善にぜんの廢まひ立た淨土じやうど往生じやうじやうの安心あんしん起行きぎやう残のこる所ところなく
會得かいとく。のま歡喜くわんぎ踊躍うよくありて。大曼荼羅だいまんぢらを本堂ほんだうお掛かけ。脚後きゃくご弟あに及び及び一山いつさんの衆僧しゆじやうハ
拜はいす。尼公にこうハ曼荼羅まんぢらの前まへにて昼ちゆう夜や六時りくじの禮懺らいぜん息いきりの更さらり。抑おさへし。皇みかど三さん十じゆ代だい欽明きんめい
天皇てんかうの御宇ごう。初はつて吾朝わがあさ佛法ぶつぽふ渡わたり。より以來いらい世よの人ひと皆みな極樂淨土ごくらくじやうどの体相ていさうハ耳みみおまりし
おまく拜見はいけんする。度た能たくま。今この般はん中將ちゆうしやう法ぽう尼に深信しん堅固けんこの徳とくおまりし。弥陀みやだ觀音くわんおん來らい

現まるりのら安樂國主の莊嚴微妙しんげんびみょう小此曼荼羅せうしまんぢら織著おりのちのら肉眼にくがんのら凡夫ぼんぷもら目前まへ
 小淨王せうじやう微妙びみょうのら莊嚴しんげんとら拜まが極樂ごくらく往生じやうじやうのら便べんとら得えるら更ま誠まこと小念佛せうねんぶつ曼昌まんぢやうの時節ときせう到いた
 未まとら縉しんつら登のぼるら去さ裡り中將ちゆうじやう禪ぜん居い藕絲おんすいのら曼荼羅まんぢらをら感得かんとくしらのら更ま世よ小隱せういんなら
 上かみ王わう候こう貴人きじんよりら下しも万民まんみんいらるらやらでら曼荼羅まんぢらとら拜まがれら我われもらとら糸緒いとぐちをら更ま蟻あちのら
 群ぐん多た如ごと當麻寺たうまじのら曼昌まんぢやう言いふら隊たい斯すてら中將ちゆうじやう居い公こう弘信心くわんしん堅固けんこ行ぎやう以い清せいのら
 先せん仁に天皇てんわう天應元年てんおうげん辛酉三月しんゆうさつ甲子けつし自身みづかみ終焉しゆうえんのら期きとら知しるら以い洗せん浴よくしてら身みとら淨じやうめ
 盤ばんのら嗽そうたら西さい小向せうかう以い端坐たんざ合掌がうじやうしてら續つ經ぎやう往生じやうじやうの時とき刻こくをら待まちひらるら以い遂つひ小午せうご尅こく
 聊りやうのら疾しやくもらたら露ろをらるらのら脚きゃく惱なうもらたら只ただ眠ねむるら大だい往生じやうじやうとら遂つひのらひらるら脚きゃく年ねん二十じふ
 九く才さい小せうりりせせのらひひるら其その脚きゃく臨りん終しゆうのら砌せき虛こ空くう示し音おん樂らく空くうええ名な香かう草そう薫くん紫むらさ雲うんのら
 引ひくら聖せい衆しゆう未ま降かうしてら安あん養やう淨じやう土ど引ひ接せつのら青せい瑞ずい現げんのら九く才さい小せう僧そう小せう於おをら
 扶桑皇統記前編卷之五たすかこうてうきぜんへんくわんごのい尾び 古今ここん未ま曾そう有いうのら大だい道どう心しんとら此こゝ尼に公こう也なりなり



享和三癸亥新刻
 文化十四丁丑再刻
 嘉永五壬子三刻

愛知縣名古屋大曾根
 矢野平兵衛

